

ふるさと探訪

第79回 東光の石灯籠



西条を東西に抜ける讃岐街道は、古くから金毘羅詣りや四国八十八カ所巡礼などで、多くの人が往来していましたが、神戸・大町両地区の間は、加茂川によってその道が遮断されています。旅人は渡船などで対岸に渡っていたのです。

そうした通行の安全を確保するため、明治4（1871）年に神戸側の土手に建てられたのが「東光の石灯籠」です。この石灯籠は、加茂川渡船場の常夜灯として設置されたものだったのです。

城郭のように上部で反り返っている石積みの上に据えられた姿は、堤防が現在ほど高くなかった建設時には、仰ぎ見る威容だったはず。その後、個人経営の賃取橋が架けられたりしましたが、明治44（1911）年に強大な木橋に架け替えられ、そして昭和14（1939）年には、上流約二百坪の地点に現在の

石灯籠の傍らに移設された旧加茂川橋の親柱には、「小松へ壹里二十三町（現在の距離で約6.5km）」「角野村へ三里三十町（同約15km）」と記されています。その昔、旅人は川風に吹かれながらこの道標を見て、歩みを早めたりしたのかも知れませんね。



加茂川橋が完成したのです。今では役目を終えた石灯籠ですが、傍らには旧加茂川橋の親柱などが移設されており、その地がかつて交通の要衝であったことを、そっと伝えています。



◀対岸から見た「東光の石灯籠」

▼今はなき旧加茂川橋により、この讃岐街道は川の向こう岸とつながっていたのです。

